

David Copperfield における女性像について

浜 田 公 一

David Copperfield (以下 *David* と略す) には主要人物として数人の女性が登場する。そしてそのうちの大部分は、この小説の主要テーマであるいわゆる *mistaken impulse* の問題と密接にむすびついている。この *mistaken impulse* というのは、これも主要な女性の一人である Annie Strong がはじめて口にすることばである。彼女は夫 Dr. Strong に対して自分の若い時代の軽はずみな情熱のためにある青年とあやまちを犯したことを告白するが、その若い時代の軽はずみな情熱を Annie は “the first mistaken impulse of my undisciplined heart”¹ といっている。「躰けも何もない若気の誤った最初の衝動」と訳されている²。若い時代に衝動的な恋愛又は結婚をして、そのことが精神面、生活面にさまざまに影響して、その後の人生が不幸になっていくという一種の因果関係である。*David* には幾組かの男女のカップルが登場するが、そのいずれの組にも男性の側か女性の側にこの “the first mistaken impulse” があり、現在の恋愛関係又は結婚生活が不幸である、といった状況が提示されている。いうならば、この小説は自己又は相手の若気の過失のために現在の対人関係が不安定な幾組かの男女関係がおりなすドラマと規定できるのである。

こういう *David* についての評価はすでに固定したもので、この立場から *David* を論じた代表的論文として Gwendolyn B. Needham の “The Undisciplined Heart of David Copperfield”³ と Kathleen Tillotson の “*David Copperfield*”⁴ の二つがある。こういう若い時代の *mistaken impulse* (以下このように略す) には明確な一つのパターンがある。若気の早まった衝動に

よる男女関係が不幸になる場合、たいてい被害者、犠牲者は女性側である、ということである。*David* における幾組かの男女のカップルにおいて、自分又は相手の男性の誤った衝動にまけて恋愛又は結婚をした場合、ある女性は娼婦に転落寸前の運命におちたり、別の女性は自己の妻としての不適格性になやまされる、という不幸を経験しているのである。

この小論においては Little Emily, Annie Strong, Dora Spenlow の三人をとりあげ、これらの女性が以上のような意味をもつ *mistaken impulse* といかに関連し、彼女たちの恋愛又は結婚生活がどのような進路をとって不幸におわったかを観察したいのである。

(1) Little Emily の場合

(a) この Little Emily と James Steerforth の関係はこの小説において、もっとも注目すべき男女の関係の一つである。この二人の関係において、いかに Emily のいわゆる *mistaken impulse* が発生し、彼女の運命に作用したかを観察するにあたって、この女性の人間性、おいたちなどを考えてみる必要がある。

彼女の境遇の特色は彼女が漁民という下層社会に生れ育っているということとをあげることができる。そして彼女はそういう漁民生活の貧困、たえず海の危険にさらされている実情について一種の不安とおそれをいだいていた。

“You would like to be a lady?” I said.

Emily looked at me, and laughed and nodded “yes”.

“I should like it very much. We would all be gentlefolks together, then. Me, and uncle, and Ham, and Mrs. Gummidge. We wouldn’t mind then, when there come stormy weather.—Not for our own sakes, I mean. We would for the poor fishermen’s, to be sure, and we’d help ’em with money when they come to any hurt.”⁵

この Emily のことばには lady になるということは経済的にゆたかになる

ことを意味し、したがって自分だけでなく家族全体、漁民全体が海の恐怖からのがれられる、という一つの理想である。Emily がこのように漁民の境遇をおそれる根本的理由は、彼女の父親が漁にでていて溺死したという事情があるのである。したがって、彼女にとって海とは恐ろしいものであると同時に父がすんでいる場所、肉親の愛情をもとめる憧憬の場所でもあったのである。

このように Emily の海との愛憎なかばする関係は彼女が両親のいない孤児でおじ Daniel Peggotty (Uncle Dan) にそだてられている、という境遇とも無縁でない。Emily が自分が lady になり、おじやその他の家族を「立派な人」(gentlefolks)⁶ にすることは Peggotty や婚約者 Ham その他の人々の愛情にむくいる唯一の彼女の手段であったのである。いちがいに下層階級の問題についての幼稚な一般の使命感とのみかたづけるわけにはゆかないのである。いいかえると、Emily にとっては自分の境遇の上から海をにくみ、海をあいし、又、同時に海と対決する(自分の運命を独力で切りひらく)ことしか許されなかったのである。このように Emily の境遇、運命は海との関係なしには考えられないのである。

“I'm not afraid in this way,” said little Em'ly. “But I wake when it blows, and tremble to think of Uncle Dan and Ham, and believe I hear 'em crying out for help. That's why I should like so much to be a lady. But I'm not afraid in this way. Not a bit. Look here!”

She started from my side, and ran along a jagged timber which protruded from the place we stood upon, and overhung the deep water at some height, without the least defence. The incident is so impressed on my remembrance, that if I were a draughtsman I could draw its form here, I dare say, accurately as it was that day, and little Em'ly springing forward to her destruction (as it appeared to me), with a look that I have never forgotten, directed far out to sea.⁷

これはまだ幼い David が Peggotty の家をおとすれ、ほぼ David と同じ

ぐらい幼い Emily と海辺であそんだときの Emily のことは、動作、さらにそれをみていた David の反応である。Emily は自分が海を少しもおそれていないことを誇示するために「……ずっと突き出して、相当の高さで海の上にかかっている、手すりも何もない凸凹^{でこぼこ}の材木の上を、軽々と駆けて行く」⁸のである。この幼い Emily の行動はそのまま彼女の海に対する姿勢をしめている。自分の身の危険をもかえりみないで憧憬と憎しみの対象である海にとびこんでゆくのである。まえにものべたように一般的な階級意識としてでなく肉親への愛情、家族や親籍に対する愛情にむくいるためには自己の危険をかえりみることなく、何ものにもとびこんでゆくことが Emily の人間性といえるのである。

したがって、このような Emily が中流家庭の裕福な美青年 Steerforth とかけ落ちしたことは、すでに幼年時代にみられたむこうみずの大胆さが、そのまま成長して、今度はいわゆる *mistaken impulse* となって、この美青年が安易に自分を lady にしてくれると判断した結果の行動といえるのである。彼女の場合の「若気の誤った衝動」においては、誤っていたのは Steerforth が自分をすぐ lady にしてくれると思った点にあるので、その動機、理由においてははやむをえないものがあつた、とみるべきである。

作者はこのような Emily の *mistaken impulse* の動機、経過そしてその結果については、すでに Emily がこの小説に登場した発端から一定のはっきりした進路と結果をきめていたようである。男にすてられた Emily が娼婦に転落する(この点についてはのちのべる)という実際の結末は、上に引用した幼い Emily が海中に突出した材木の上を駆けてゆくという所で、David の印象として “little Em'ly springing forward to her destruction” [Italics mine] という所にすでに暗示されているのである。

(b) このようにして発生した Emily の *mistaken impulse* が実際彼女にどのような不幸な結末をもたらしたかの問題である。具体的な運命として推定できることは、彼女は Steerforth にすてられたのち、行くえ不明となり、

そのあいだに娼婦に転落したであろう、ということである。しかしながら小説中には、どこにも彼女が娼婦に転落した、とはのべられていない。彼女は行くえ不明ののち、おじ Peggotty によって発見され (chap. L), さいごには、このおじと一緒にオーストラリアに移住するのである (chap. LVII)。しかしこの結末はあきらかに Emily の運命の重要部分をかくしていると推定してよい。彼女が娼婦であったとの直接的説明はないが間接的な暗示はいくつか発見できるのである。

一つには Emily の発見に協力した女性として Martha Endell がいることである。この女性は Emily の幼なじみで、Emily の婚約者 Ham は彼女のことを、

“It’s a poor worm, Master Davy,” said Ham, “that is trod under foot by all the town. Up street and down street. The mould of the church-yard don’t hold any that the folk shrink away from, more.”⁹

といっている。これはあきらかに卑しい娼婦の身分をいみしている。この Martha Endell が最初に Emily を発見し、自分のいかがわしい下宿に Emily をかくまったのである (chap. L)。又、まだ Emily とあまり親しくない Steerforth が彼女のあとをつきまとう Martha の姿をみてふしぎがり “That is a black shadow to be following the girl... what does it mean?”¹⁰ といぶかっている。自分が将来、同じ運命につきおとすであろう Emily のことをこのようにいっているのは、無意識の内に彼女の運命を予測しているのである¹¹。

しかしながら以上のような Emily の具体的結末よりも、彼女にとってほんとの意味で不幸であったのは、彼女の精神面である、すでに(a)の所でのべたように Emily は自己の境遇の上から mistaken impulse をもたざるをえなかったし、その対象としてたまたま Steerforth をえらんだことが転落につながったわけである。やむをえない衝動をもったということが Emily の場合の不幸である。

(2) Annie Strong の場合

Emily の場合は間接的に階級問題をふくんだ典型的なかけ落ち事件であるが、Annie の場合は一種の家庭悲劇である。彼女は親子ほどに年のちがう Dr. Strong と結婚している。現在の生活自体には何不足なく、Dr. Strong も彼女を愛している。しかし彼女には過去において幼なじみ Jack Maldon と過失を犯した¹²、という良心の呵責があって夫 Dr. Strong が愛してくれれば、くれるほどにこの秘密をかくしきれなくなるのである。

“All that has ever been in my mind, since I was married,” she said in a low, submissive, tender voice, “I will lay bare before you. I could not live and have one reservation, knowing what I know now.”

“Nay, Annie,” said the Doctor, mildly, “I have never doubted you, my child. There is no need; indeed there is no need, my dear.”

“There is great need,” she answered, in the same way, “that I should open my whole heart before the soul of generosity and truth, whom, year by year, and day by day, I have loved and venerated more and more, as Heaven knows!”¹³

寛大な夫であるがゆえに、又自分もそういう夫を愛しているがゆえに過去の秘密を告白したい、という Annie の立場はこのことばにせめられている。

Emily の立場と Annie の立場のちがいは年齢、境遇もあるが若気の誤ちという問題が Emily の場合は現実の生活の問題と直結しているのにたいして、Annie の *mistaken impulse* は現在の生活とは関係がないのである。いいかえると Annie の *mistaken impulse* は過去への反省という形で小説の中で客観的に語られている、ということである。

“We (Annie and Jack Maldon) had been little lovers once. If circumstances had not happened otherwise, I might have come to persuade myself that I really loved him, and might have married him, and

been most wretched. There can be no disparity in marriage like unsuitability of mind and purpose. . . . If I were thankful to my husband for no more, instead of for so much, I should be thankful to him for having saved me from *the first mistaken impulse of my undisciplined heart.*"¹⁴ [Italics mine]

Jack Maldon とのこゝをこのように回想し、現在の夫 Dr. Strong に感謝する Annie のことばの中には、一般的問題としての「結婚とはいかにあるべきか」ということと「若気の誤ち」とは何かということが述べられている。「性格、目的の違いほどに、夫婦の仲を割くものはないでしょう」¹⁵、さらに「躰けも何もない若気の誤った最初の衝動から私を救ってくれた……」という二点は「自分が Jack Maldon と結婚していても、一時の情熱のためであまくいっていないにきまっていた。彼とのことは若気の過失だった」という反省の集約であり客観視でもある。

こういう Annie のいわば過去の過失への反省、客観視がこの小説全体に対してもっている意味は、この小説の主人公 David をして、自分の中にも Annie の場合と同質同形の *mistaken impulse* が存在しており、そのために自分と Dora との結婚生活があまくいっていないのではないか、という不安の動機をあたえている点である (David と Dora の結婚生活が失敗した原因についてはのちにのべる)。Annie の以上のような告白を、たまたまその場にいあわせてきいた David は

I pondered on those words, even while I was studiously attending to what followed, as if they had some particular interest, or some strange application that I could not divine. "There can be no disparity in marriage like unsuitability of mind and purpose" — "no disparity in marriage like unsuitability of mind and purpose."¹⁶

と内省するのである。小説全体をとうして主人公 David が自己の Dora との結婚生活について反省するのは、これがはじめてである。いいかえると、

この小説の主要テーマである *mistaken impulse* の問題を主人公 David の心理にむすびつける手段、動機づけとしてこの Annie の家庭悲劇のエピソードは提出されているのである。Annie の *mistaken impulse* が現在と関係のない過去のことであり、彼女が過失を客観視して告白するという状況設定は作者がこの中心テーマを明確に主人公と直結したい、という意図からでているのである。

Annie の場合の *mistaken impulse* によってもたらされた不幸というのは、Emily の場合のような現実的かつはげしい運命の変化ではない。簡潔にいうならば、自己の過去の過失のための良心的呵責そのものである。しかし彼女の告白の中にしめされているのは単に過去の過失のための良心的呵責という単一的な問題のみではない。Annie の母親 Mrs. Markleham は娘を高名の学者 Dr. Strong と結婚させることによって、金銭的援助を得ようという野心があった。親子ほどに年のちがう Dr. Strong とあえて Annie を結婚させたのはそのためである。したがって Annie としては、それまで父のように尊敬していた老学者を突然自分の夫としてみなければならず、同時に、自分が母親の金銭的野心の道具になっているという恥ずべき意識に苦悩しなければならなかったのである。

“It was so great a change : so great a loss, I felt it at first, that I was agitated and distressed. I was but a girl; and when so great a change came in the character in which I had so long looked up to him, I think I was sorry....”¹⁷

“I never thought of any worldly gain that my husband would bring to me. My young heart had no room in its homage for any such poor reference.”¹⁸

この二つの Annie のことばに彼女の立場の苦痛がかたられている。彼女の不幸というのは、過失への後悔と同時に、無理解な母親のための犠牲者としての苦痛もふくまれているのである。Emily の場合と比較すると、Emily

の不幸はより具体的、決定的であるのに対して Annie の場合は心理的、内面的である。

(3) Dora Spenlow の場合

(a) Dora の場合は Emily とか Annie の立場とことなっている。いままで考えてきたように、Emily も Annie もやや特殊な立場の女性たちである。Emily のようなかけ落ちも Annie のような過失とか恥ずべき結婚の動機などは一般の女性の経験しないことである。Dora はその点、平凡な境遇の女性といえる。比較的裕福な Proctor (代訴人) を父とし、母親はすでに亡く、一人娘として自由にやや気ままに育っている。彼女はまわりの青年たちから “a pretty toy or plaything” とか “a pet child”¹⁹ とか、もてはやされている少女である。Emily のような生活問題とも Annie のような過失とも無縁である。

この Dora が小説の主人公 David と結婚したことについて、それを Dora の側の *mistaken impulse* とすることはできない。彼らの結婚生活が失敗したことは David 自身の責任である。世間知らずの、あまり思考力のない一人娘が一時的衝動にかられて行動をおこすことはあまりない。つまり Dora はこの小説において、はじめから自主的判断のない、いわば他律的な女性として設定してあって、元来は父親のえらんだ青年と平凡に結婚するはずの女性であった。しかし David の *mistaken impulse* のために彼と結婚して境遇が一変するのである。

David—Dora のカップルにおいて David の側にもどのような無思慮と責任があったかの問題を考えると、第一に彼は Dora という少女が結婚生活という現実に不適格であることが見ぬけなかった点がある。

“Dora, indeed!” returned my aunt. “And you mean to say the little thing is very fascinating, I suppose?”

“My dear aunt,” I replied, “no one can form the least idea what she

is !”

“Ah! And not silly?” said my aunt.

“Silly, aunt !”

I seriously believe it had never once entered my head for a single moment, to consider whether she was or not. I resented the idea, of course ; but I was in a manner struck by it, as a new one altogether.

“Not light-headed?” said my aunt.

“Light-headed, aunt !” I could only repeat this daring speculation with the same kind of feeling with which I had repeated the preceding question.²⁰

この David と彼のおば Betsey Trotwood の会話にしめされているのは、おばの Betsey は結婚生活の現実を充分知っていて、Dora がそれにたえうる女性でないことを David に暗示しようとしていることである。一方 David の方はそういう深い配慮にも気づかないで Dora の外面的美しさだけに夢中になって、おばにむしろ腹をたてているのである。Betsey はさらに David の若さのための無思慮を “blind, blind, blind !”²¹ ときめつけている。

David の責任の二番目として、彼は自分の境遇が急変して、それまであてにしていた Betsey の財産がなくなった時点で Dora との婚約を破棄すべきであった²²、ということがある。その時点で David は一人の貧乏な法学生になりさがり、これから自活の道をきりひらかねばならなくなったわけで、Dora のような世間しらずの一人娘と結婚することは不可能との判断が必要であった。このことがとくに David の責任となる理由は、実際のストーリーがしめすように彼らの結婚後の日常生活は、Dora がまずしい生活になれていないために引き起こされる混乱、幻滅の連続であったことでもわかるのである (chap. XLIV)。いいかえると、David の適切な判断があれば、Dora をきびしい現実の生活にふれさせないでもよかったのである。Dora は元來他律的な女性としてこの小説の中で設定されているという意味は、このように

他人（この場合は David）の盲目性、無思慮のために自分の運命をかえさせられた、という受身的立場をさしているのである。

(b) Dora が以上のような原因のためにこの小説の中で不幸な立場にたたされている状況は、彼女の David との現実生活の面と、彼女の内面心理の両方から観察できる。すでにのべたように、裕福に育った一人娘の彼女が無一文にちかい自己の全生活費をかせがなければならぬ David と生活することとは、たちまちゆき詰まるのである。

Dora told me, shortly afterwards, that she was going to be a wonderful housekeeper. Accordingly, she polished the tablets, pointed the pencil, bought an immense account-book, carefully stitched up with a needle and thread all the leaves of the Cookery Book which Jip had torn, and made quite a desperate little attempt "to be good," as she called it. But the figures had the old obstinate propensity—they *would not* add up. When she had entered two or three laborious items in the account-book, Jip would walk over the page, wagging his tail, and smear them all out. Her own little right-hand middle finger got steeped to the very bone in ink: and I think that was the only decided result obtained.²³

この文中の Jip というのは Dora が実家からつれてきた愛犬である。この Jip が Dora がなれぬ家計簿をつけようと努力しているのを妨害する、ということは Dora は結婚後もやはり実家にいたときのままの a pretty toy 又は a pet child にしかすぎず、自分を環境の変化に適應させることができない女性であることをしめしている。Jip という犬は実は環境になじめない女性 Dora 自身の象徴ともいえるのである。

しかし、このような現実生活面での失敗一つ一つは、それ自身 Dora にとって大して不幸の理由とはならないのである。たとえば Emily が娼婦に転落したことと比較すれば生活の不便さなど不幸とはいえないかもしれない。

しかし、問題はこういう日常のささいな不便さ、くいちがいが次第につみかさなると、夫婦の間の大きな内面的問題にまで発展する可能性があるということである。David 自身後年になって Dora との混乱した日常生活を回想して

I think of every little trifle between me and Dora, and feel the truth, that trifles make the sum of life.²⁴

といっているのである。いいかえると日常生活のささいな不便さ、くいちがいの集積は夫又は妻の内面心理にまで重大な影響をおよぼすものである。

具体的に小説中において David が Dora との結婚生活の失敗を自己の誤った衝動のためとして、その責任を痛感している所としては、たとえば彼は次のように告白しているのである。

“The first mistaken impulse of an undisciplined heart.” Those words of Mrs. Strong’s were constantly recurring to me, at this time; were almost always present to my mind. I awoke with them, often, in the night; I remember to have even read them, in dreams, inscribed upon the walls of houses.²⁵

Annie Strong の問題を考えたときのべたように、引用文14の Annie のことばは David に結婚生活についての反省の動機をあたえているわけであるが、現実の結婚生活の失敗にあたって、David はいまさらのように Annie のことばを思いおこしているのである。むかし Annie のことばをきいたときのばく然とした将来に対する不安感と（引用文16）、今回のみじめな結婚生活の失敗という現実に対面したときの切実感との相違は、二つの引用文(16, 25)を比較すると明白である。たとえば前者においては、“... as if they (Annie’s words) had some particular interest, or some strange application that I could not divine ...” といっているのに対して、後者においては “Those words were constantly recurring to me ... I awoke with them, often, in the night...” といっそう緊迫しているのである。日常生活のあ

まりの混乱、不便さは、ついには David をしてこのような自己の責任の明白な認識へとかりたてたのである。

Dora という女性は元来あまり思考能力のない性質で、このことは彼女自身よく知っており、“It’s better for me to be stupid than uncomfortable, isn’t it?”²⁶ といっていることでもわかるのである。この、あまりものを考えたがらない性質の Dora がさきへのべた David との日常生活における不便さ、くいちがいの連続のために、最後には次のような一つの認識に到達する。

“I am afraid, dear, I was too young. I don’t mean in years only, but in experience, and thoughts, and everything. I was such a silly little creature! I am afraid it would have been better, if we had only loved each other as a boy and girl, and forgotten it. I have begun to think I was not fit to be a wife.”²⁷

この Dora の自己評価又は自己の立場の客観視の特色はすでに (a) の所で考えたように、彼女と David とが結婚した責任は大部分、夫の David の方にあるにもかかわらず「自分が欠点だらけであり、妻としては不適格である」としている点である。彼女の David に対する愛情がこのように言わしめたのか、もともと思考能力が貧弱なために David の側の *mistaken impulse* に気づかなかったのかは不明である。しかし、ただ一つの点、思考能力が貧弱にもかかわらず、このような客観的認識に到着せざるをえなかった Dora の境遇それ自体は Emily のそれと十分比較しうるほどの不幸な運命といえるのである。しかも、この Dora の自己評価は実は David の一方的な責任を意識しないで、すべてを自己の責任としている間違った認識であるという点において、彼女の不幸な立場を二重に深めているのである。

以上において Little Emily, Annie Strong さらに Dora Spenlow というこの小説の三人の女性をとりあげ、彼女たちといわゆる *mistaken impulse* がいかに関連しているか、その *mistaken impulse* が結果として彼女たちに

いかなる不幸をもたらしたかを観察してきた。Emily の場合は自己を犠牲にしてでも家族を裕福にしたいという願が彼女を lady になりたいという衝動へとかりたて、ついに娼婦に転落してしまった。Annie の場合は現在の夫 Dr. Strong を愛するのあまり、過去の過失を告白せざるをえなかった。そして最後に Dora は自分の側ではなく夫 David の *mistaken impulse* のために彼と結婚した結果、混乱した日常生活のあげく、ついに自分こそが結婚生活の失敗に全責任があると思いきなだま死んでしまうのである。いずれの女性をとりあげても *mistaken impulse* のおこりかた、その影響のしかたは個々的には違おうとしても、彼女たちの境遇、運命は共通して不幸である。前述の Annie が過失の告白をしたのちに、夫 Dr. Strong の愛情にすがろうとして、

“ Oh, take me to your heart, my husband, for my love was founded on a rock, and it endures ! ”²⁸

とうたっている。Emily にしても、又 Dora にしても Annie と同様にこの「巖の上に築かれた愛」²⁹をもとめてのかけ落ちであり、結婚生活であったことは言うまでもない。彼女たち自身の中にあつた、又は他人の中にあつた *mistaken impulse* が、そういう永続性のある愛情、結婚生活をはばんだのである。

David における女性像を考える場合、以上のべてきた三人の女性は彼女たちの不幸な運命にもかかわらず、小説全体からみでの役割において Agnes Wickfield よりおとるのである。Agnes という女性は David の幼なじみで、Dora の死後 David と結婚するこの小説の “real heroine”³⁰ である。この女性だけは小説中において若気の誤った衝動とは無縁である。彼女は他の女性たちと異なり無傷の聖女であり、転落も過失もなく頭もよい。この小説において Agnes は今まで考えてきた女性たちの不幸を土台にして “an Angel”³¹ としての位置をあたえられているのである。この Agnes がなにゆえ不幸な三人の女性を超絶して聖女としての人間性をしめし、幸福な結婚生活を送り

えたのか、この辺にも問題がありそうである。別の機会に考えてみたい。

注

- 1 Charles Dickens, *David Copperfield* ("The New Oxford Illustrated Dickens"; London; Oxford University Press, 1960), p. 661.
- 2 中野好夫訳、『デイヴィッド・コパフィールド』(四) (『新潮文庫』; 東京: 新潮社, 昭和四十二年 [1967]). p. 65.
- 3 *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 9. (1954-1955). pp. 81-107.
- 4 John Butt and Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* (London: Methuen, 1963), pp. 114-176.
- 5 *David Copperfield*, p. 35.
- 6 『デイヴィッド・コパフィールド』(一) p. 65.
- 7 *David Copperfield*, pp. 35-36.
- 8 『デイヴィッド・コパフィールド』(一) p. 66.
- 9 *David Copperfield*, p. 336. この Ham のことは小説中においては方言でいわれているが標準語になおしたものを引用した。(山本忠雄註訳 *David Copperfield*, Vol. II, p. 142. 「研究社英米文学叢書」[1959]).
- 10 *Ibid.*, p. 326.
- 11 Emily をはっきりと娼婦とかななかった理由を Tillotson は "Dickens was anxious to soften the Victorian reader's heart towards such an outcast." (*Dickens at Work*, p. 148) とのべている。又、オーストラリアは当時、転落女性が更生するための場所であった実情を、Tillotson は雑誌 *Household Words* (April 1850) の記事を引用して説明している。(*Dickens at Work*, pp. 166-167).
- 12 Annie の Dr. Strong にたいする告白から判断するかぎり、彼女と Jack Maldon との過去の関係は具体的にどの程度であったか語られていない。彼女自身は "the dark suspicion that shadowed my life" (p. 661) といっているにすぎない。David もこのことについて "my old doubts and apprehensions on that subject" (p. 608) と不安をのべているだけであり、「過失」という表現は一度もつかっていないのである。しかし、17才で Dr. Strong と結婚した Annie は、それ以前に妨げなみ Jack Maldon と秘密のつながりがあったとみるのが自然である。ちなみに Tillotson はこの点について、"Annie Strong is entangled in an old love affair." (*Dickens at Work*, p. 158) とのべており、A. E. Dyson になると、はっきり "his (Dr. Strong's) total ignorance of his wife's possible infidelity", さらに断定的に "the guilt" ともいっているのである。つまり、この Annie の逸失の場合も Emily の転落と同じく、当時の時代的背景

- を考えて、作者は間接的にしか表現しなかった、とみるのが妥当である。(A. E. Dyson, *The Inimitable Dickens* (Macmillan, 1970), p. 147.)
- 13 *David Copperfield*, p. 658.
 - 14 *Ibid.*, pp. 660-661.
 - 15 『デイヴィッド・コパフィールド』(≡) p. 385.
 - 16 *David Copperfield*, pp. 660-661.
 - 17 *Ibid.*, p. 659.
 - 18 *Ibid.*, pp. 659-660.
 - 19 *Ibid.*, p. 604.
 - 20 *Ibid.*, pp. 503-504.
 - 21 *Ibid.*, p. 504.
 - 22 Aunt Betsey は財産をいろいろな事業に投資して、おもわくがはずれ、ほとんど無一文の状態でロンドンの David の下宿にやってくる。そして彼と同居生活をはじめるのである (chaps. XXXIV, XXXV).
 - 23 *David Copperfield*, p. 644.
 - 24 *Ibid.*, p. 768.
 - 25 *Ibid.*, p. 698.
 - 26 *Ibid.*, p. 696.
 - 27 *Ibid.*, p. 767.
 - 28 *Ibid.*, p. 663.
 - 29 『デイヴィッド・コパフィールド』(≡) p. 390.
 - 30 これは Tillotson のことばである。これに対して Dora のことを “an illusory heroine” といっている (*Dickens at Work* p. 130)。問題はなにゆえ Agnes が real であり、Dora が illusory であるのか、ということである。
 - 31 *David Copperfield*, p. 376.

Synopsis

Women Victimized by "Mistaken Impulse" in *David Copperfield*

Koichi Hamada

David Copperfield portrays several unhappy marriages born of *mistaken impulse* on the part of one of the partners. Urged by sudden emotion, young people often marry or fall in love, and most of these alliances turn out to be miserable failures.

Little Emily, for example, elopes with James Steerforth thinking that he will make her a 'lady'. Deserted by her lover, she is nearly degraded to prostitution; her *mistaken impulse* in choosing James Steerforth as her lover leads to her destruction.

Annie Strong's case is quite different. Her husband, the famous scholar, Dr. Strong, loves her tenderly and generously, and their married life is peaceful. Annie's happiness, however, is marred by the gnawing memory of her secret love affair with Jack Maldon. When she finally reveals her secret, she confesses that her fault was due to *mistaken impulse*. Incidentally, she is the first to so name the origin of her error.

A third example is Dora Spenlow, the only daughter of a rich proctor. Unlike Little Emily and Annie Strong, she is quite immune to elopement and secret folly, her having been brought up under the strict surveillance of an over-protective father. She should have been married to a promising member of the *élite* of her father's choice, but she married David, a poor apprentice in a legal office. Indeed, it was David's *mistaken impulse* that made him propose marriage to the "pet child" and

“pretty toy” of a rich proctor. As was to be expected, David’s urgent desire to ‘train’ Dora and Dora’s childishness and impracticability soon turned their boy-and-girl romanticism into disillusionment and confusion.

These three examples of *mistaken impulse* consistently show its martyr to be the woman and not the man, the man being somehow singularly free from the misfortunes arising from an impulse which itself may originate in either.

This article consists of a detailed examination of the relationship between *mistaken impulse* and the consequent misfortunes of women in *David Copperfield*.